

港北の消防

第60号

平成31年4月1日 編集
横浜市港北消防団 (港北消防署内)

第四分団バス研修会

横須賀研修 第四分団 第一班 班長 垣中 祐二

平成三十年十一月、第四分団としては二回目となるバス研修会が行われました。第八分団第四班の皆さんも参加し、総勢二十四名での研修会となりました。

目的地は横須賀。船による軍港めぐりと海上自衛隊横須賀基地の視察です。肌寒くはありましたが天候にも恵まれました。

横須賀汐入桟橋から蒸気船を模した船に乗り、右に米軍基地、左に自衛隊基地を望む形で海に浮かぶ護衛艦などを見学しました。米軍基地には力ナタの船も入っており、横須賀でも珍しい景色を見ることができました。また何隻も潜水艦が係留されており、広島の呉で生まれ育った私には、どこか懐かしさ、故郷の景色と重なりました。

下船後、横須賀観光名所の「ぶ板通り」を視察しました。日本なのにまるでアメリカを思わせる街並みを体験。思いのほか「ぶ板通り」は短く、夜の店が多いと見えて、平日の昼間はつら寂しい感じは否めませんでした。昼食後、海上自衛隊横須賀基地を訪れました。



まず、会議室で自衛隊についてのレクチャーをいただき、国防の何たるかを教えていただきました。その後、護衛艦「村雨」に乗船させていただき、かなりの範囲を見せていただきました。建造後二、十四年程経過しているとは思えないほど外装・内装とも

に美しく、自衛官のみなさんの日頃の手入れが徹底されていることがよくわかりました。当然ではありますが、消火活動等が使われる備品類も十分に手入れが行き届き、万全の体制がいつも整っていると感じ取ることができました。

また、若い自衛官の方に説明をいただきましたが、穏やかな語り口の中に、きちんとした礼節を感じ、日頃の訓練に自主的に取り組んでおられる姿勢を感じました。消防団とは違って職業として従事されているらしい印象が、根本は同じです。地域が国かの違いはありますが、共感できる部分がたくさんありました。私たちも地域のために、きちんとした礼節をもって活動を続けなければならぬことを再確認し、非常に有意義な研修会となりました。

今回の研修にご協力いただいた方々に感謝いたします。ありがとうございました。

入団二十五周年を振り返って

第一分団 第一班 班長 岩田 正吾

私が消防団に入団したのは平成四年、三十二歳の時でした。父が消防団にいたこともあったり、当時の団員の人は子供ながら私も知っている人ばかりでした。勧誘に来られた時、いざは地元で何らかの形で少しでも役に立てればと考えていた私は、班長の「やる時は出ていける時だけ出ていければいいよ。」という言葉に見事に乗せられ入団を引き受けました。

入団してすぐに、消防団員としての心構えや訓練方法を教わり、一か月後、八月に開催される夏季訓練会の小型ポンプ操法の選手(一番員)として出場することになりました。当時はビデオやDVDもなく、配布されたマニュアルと諸先輩の経験による指導が頼りでした。五月の連休明けから約三か月間、週二回の練習を繰り返して、何とか格好がつくようになりました。

大会当日は、一発勝負で、放水操作は順調にこなすことが出来ましたが、撤収操作で筒先を掴みながらホース一本を巻き終え戻った時、筒先

を降ろそうとしたら被っていたヘルメットが脱落してしまいました。焦った私は二本目のホース巻きでもミスを重ねてしまい、無残な結果となってしまいました。一緒に参加した選手の手を引く張り立ち込んでいる私に、「新人ながらよく頑張ったよ。」と労ってくれた班長や先輩方の言葉は今でも心に残っています。

のちの訓練会では、指揮者・一番員の指導係として自分の失敗談を伝えながら人に教えることで、操法技術や基本動作を身につけることができました。この時の貴重な体験が、消防団員として活動する今の自分の大きな支えとなっていることは云うまでもありません。

今後は微力ながら、消防団活動を通じて地元での防災・災害時の減災に努めていきたいと思っています。



第一分団第二班と城郷地区の紹介

第一分団 第二班 副班長 蛭田 恭章

昔は鳥が沢山いたので名付けられたのか？私達、第一分団第二班は、小さい山、鳥山を囲むように住宅が立ち並ぶ地域、鳥山町を管轄している消防団です。第一分団第二班と城郷地区について、三つのことを紹介します。

永年に渡り、消防活動で使用してきました私達の消防小屋が、老朽化を理由に、平成二十九年に建て替えられました。旧小屋を解体し、新しい小屋ができるまでの間、仮小屋を造ることにしました。

が、団員には大工をはじめ職人が何人もいて、皆の協力で立派な仮小屋ができ、その仮小屋に積載車や器具を一時的に収納しました。現在は、新しい小屋を拠点とし、災害対応や広報等を実施しています。

一昨年は、ポンプ操法大会の当番で四月から訓練を始め、小机消防出張所長のご指導のもと、選手とサポートする団員が一つとなりしっかりと訓練をしたかいて第二位の成績



績を得られました。団員の結束も同時に得られたのも良かったです。

私達の住む城郷と呼ばれる地区は、戦国時代に建てられた小田原城の支城である小机城がありました。小机城の由来や歴史の普及と、地域の観光振興を図るため、二十五年前から毎年四月に小机城址祭が開催されています。武者行列を始め沢山の人がパレードに参加し、本丸では出陣式の演出や地域の方のパフォーマンスもあつて年々賑わいを増しています。

小机城は純日本一〇〇名城にも選定され、今後ますます多くの方が訪れるお祭になると思います。私達も地元の消防団としてパレードに参加したり、また警備に従事しています。地域の活性化、また小机城址の歴史を次の世代に語り続けてもらえらる様に願っています。

これからも皆さんと協力して防災に努め、そして明るい街づくりにも貢献していきたいと考えています。

篠原西町公園での署団の連携訓練

第二分団 第一班 山崎 通

平成三十年十二月八日、朝から篠原西町公園に、港北消防署長をはじめとした署員の方と二分団の消防団員が集まってきました。

今回は、100ミリホースでの大量送水と木造密集地域に配備をされているガンタイプノズルでの放水訓練をすること。

まずは消防器具置場から100ミリホースを取り出しますが、このホースが重い！二人で一本の巻きを運びます。さらに一般道をホースが横断することから、一般車両を通行させるためホースブリッジを設定することに。特に軽自動車はタイヤが小さく、水の入った100ミリの太いホースを絶対に乗り越えることができないため、ホースブリッジは必需品です。しかし、このホースブリッジがまた重い！ようやく公園の斜面の中腹の組立水槽までホースを展開したところで地下式の消火栓より吸水した水をポンプ車で加圧して65ミリのホース4本を集水媒介で100ミリ一本に集め斜面中腹まで送水。100ミリのホースの圧力損失は低いので、このまま40ミリのホース4線での放水が可能です。今回は分水媒介で65ミリ4本に分けて水槽に水を溜め、団の可搬ポンプと署のポン



プ車で加圧しての65ミリホースを40ミリ2本に分水して住宅火災を想定した延焼防止と消火の訓練を実施し、各箇所の動きの確認をしました。今回の大量送水訓練では、少し離れたところにある消火栓や自然水利の水も消火に使えるため、大規模災害時には広範囲に対応ができることが確認できました。

中原消防団との合同研修

電車からの避難誘導訓練 団本部 部長 田川 博幸

平成三十一年二月十二日、東急電鉄元住吉総合事務所において、川崎市中原消防団との合同研修(副分団長以上対象)が行われました。

今回の研修は、電車走行時、駅間における事故により緊急停止し、乗客の避難誘導等が必要となった場合に、支援に駆けつけた消防団員がどのような行動をとればいいのか、について実際の車両を使用し、訓練が行われました。電車の乗務員の方からは、消防団にどのようなことをしてほしいのか、といった点のレクチャーが多くありました。ここでは、我々消防団員に望まれる協力について報告します。



①電車内での停電の発生、②地震(震度4以上)発生、③地震による津波発生予想、④電車内外で火災発生、などの異常事態が発生し、乗客が最寄りの駅まで線路を歩いて避難しなければならなくなった場合に、応援をしてほしいとのことでした。そのような状況になつたら運転士または車掌に「消防団です。」と声をかけてもらうと心強いとのことでした。

具体的にはどのような協力を求めるかについて、一つ目は、緊急避難をする際の非常梯子(車両前後に二台)の設置補助です。もう一つは、直接降車(開放されたドアから直接地面に降りる避難方法)しなければならぬ場合の補助です。開放したドア部分にいったん座り足を車外に出した後、直接地面に降りますが、その際に消防団員が率先して降車するとともに、続いて降車する乗客のサポートをします。

ある程度乗客が降車したら、次は率先して避難するという協力をしてほしいとのことでした。

大災害発生時における防災の現場を考えると、災害発生後から七十二時間以内を生き延びるための訓練、また防災グッズ等の普及に関する訓練、また防災グッズを中心に熱心に行われているとともに、活発な議論も行われています。しかしながら、本当に怖いのは七十二時間以降のことではないでしょうか。命は助かり、公的な支援によって、最低限ではあるが食べ物や飲み物も足りている、僅かばかりの寝床もある。けれど人の目を気にしながらの共同生活やいつまで辛抱すればいいのか先の読めない不安を抱えながらの避難所暮らし、また大なり小なり不安と正義の押し付け合いが生じる人間関係。こうしたストレスは、時に私たちから些細な喜びを染め取るような人間らしい感情をも奪ってしまつていくことがあります。それに対するには、生き延びることへの意志の力よりも、日々生きていく実感を感じ重ねて行く「気分の力」が大切になります。

気分の力

第三分団 第二班 村上 祐資

地域の消防団の役割は、一般には災害発生直後の活動が最も重要になります。地域の事情に精通した消防団が、迅速、的確に、乱れることなく活動を行う。これは「意志の力」の鍛錬の領域です。しかし消防団に入団してから気づいたことは、これとは別の、「気分の力」の領域の活動が多くあるという点です。それは地域の方々と、行事等を通じて交流することであったり、こうしたささやかな人と人の関係の積み重ねは、いざという時に大きな力になるのだと思います。なかなか自分の仕事が忙しく、地域を留守にする時間が長い場合、こうした活動が疎かになつてしまっている自分への戒めとして、書かせて頂きました。

す。災害発生時に駆けつけた消防団員が自ら率先して危険を避ける行動を起こす人「率先避難者」になることが望まれています。



